

昭和二十六年十月十五日発行(毎月一回・十五日発行)  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

(通第三十一号)

# 慈

# 光

第三卷 第十號

## 目

## 次

惠信尼公文書……………	(1)
難陀の救済……………	花田正夫 (2)
聖親鸞を語る……………	福島政雄 (6)
眞実の淨信……………	中野駿太郎 (12)

去歳の十二月一日の御文、同二十日あまりに確に見候ひぬ。何よりも殿（聖人）の御往生なかなかはじめて申すに及ばず候

山を出でて、六角堂に百日籠らせ給ふて、後世を祈らせ給ひけるに九十五日の曉、聖徳太子の文を結びて、示現にあづからせ給ふて候ひければ、やがてその醜いでさせ給ふて、後世の助からん縁にあいまらせんと、たづねまいらせて、法然上人にあいまらせて、又六角堂に百日籠らせ給ふて候ひけるやうに、又百か日、降るにも照るにも、如何なる大事にも、まいりてありしに、ただ後世の事は、よき人にもあしきにも、同じ様に、生死出づべき道をば、ただ一筋に仰せられ候ひしを、うけ給はり定めて候ひしかば、上人のわたらせ給はん処には、人はいかに申せ、たとひ悪道にわたらせ給ふべしと申すとも、世々生々にも迷ひければこそありけめとまで、思いまいらする身なればと、様々に人の申し候ひし時も、仰せ候ひしなり。

きて、常陸のしもつまと申し候ところ、さかいの郷と申すところに候ひし時、夢をみて候ひしやうは、堂供養かと覺へて、東向に御堂はたちて候に、しんがくと覺えて、御堂の前には立燭しろく候に、立燭の西に、御堂の前に鳥居のやうなるに、横ざまにわたりたるものに、佛をかけまいらせて候が、一體は、ただ佛の御顔にてわたらせ給はで、ただ光のま中、佛の頭光のやうにて、正しき御形は見へさせ給はず、ただ光ばかりにてわたらせ給う。いま一體は正しき佛の御顔にてわたらせ給ひ候ひしかば、これは何佛にてわたらせ給ふぞと申し候へば、申す人は何人とも覺えず、あの光ばかりにてわたらせ給ふは、あれこそ法然上人にてわたらせ給へ、勢至菩薩にてわたらせ給ふぞかしと申せば、さて又、いま一體はと申せば、あれは観音にてわたらせ給ふぞかし、あれこそ善信（親鸞）の御房よと申すと覺えて、うち驚きて候ひしにこそ、夢にて候ひけりとは思ふて候ひしか。

さは候へども、左様の事をば、人にも申さぬと聞き候ひしうへ、尼が左様の事申し候らむは、けにけにしく人も思まじく候へば、てんせい、人にも申さず、上人の御事ばかりをば、殿に申し候ひしかば、夢には品わい敷多ある中に、これぞ実夢にてある。上人をばしよしよに、勢至菩薩の化身と、夢にも見まいらす事、敷多ありと申すうへ、勢至菩薩は、智慧のかぎりにて、しかしながら、光にてわたらせ給ふと候ひしか、とん、観音の御事は申さず候ひしかども、心ばかりは、其後うちまかせては思いまいらせず候ひしなり。かく御心得候べし。されば御臨終は如何にもわたらせ給へ、疑ひまいらせぬうへ、同じ事ながら、益方も御臨終にあいまいらせて候ひける、親子の契と申しながら、深くこそ覺え候へば、嬉しく候、嬉しく候。

追申  
このもんど、殿の比叡の山に堂僧勤めておはしけるが、山を出でて、六角堂に百日籠らせ給ふて、後世の事祈り申させ給ひける、九十五日の曉の御示現の文なり。御電候へとて、書き記してまゐらせ候。

難陀の救済

花田正夫

佛陀がカピラ城を出られて後、御異母弟、難陀が淨飯王の後継者として選ばれソングダリー姫を迎へて豪華な生活をしてゐたが、佛陀の善巧と慈悲によつて佛弟子となつた。

然し難陀の心は世間の快樂を想うてやまず、妃のソングダリーの絵像まで描いて、恋ひ慕つてゐて、佛陀の善語を聞きながら、それが一向に身にはなかつた。

「難陀は煩惱熾盛であるから、これをさますには大方便をめぐらし、火をもつて火を滅し、毒を以て毒を滅するの外なし」

と佛陀は念じ給うて、或日難陀の手を執り神通力をもつて香醉山上に出現し給うた。山内には五百の猿公が棲み、その中に山火事で傷つき盲目になつてゐる一匹の雌猿があつた。佛はその醜い盲の雌猿を指さされて

「難陀よ、この盲の雌猿を見よ。汝の妃ソングダリーといづれがまされりや」

と話しかけ給うた。難陀は佛の仰せのあまりに惨酷なのに驚き、眉をひそめ、顔をしがめてお答も申さなかつた。

佛陀はまた難陀の手を執り香醉山から身を没して天上界に現れ給うた。そこには帝釈天が五百の天女と共に遊戯欲樂す

る姿がいかにも美しい極みであつた。人間の美はただ粉飾によるが天女の美は清淨無垢の美であつた。難陀はしばしソングダリーの事を忘れて天女の美麗さに見とれてゐると、佛陀はすかさず

「難陀よ、五百の待女の遊戯するのを見ずや。この天女とソングダリー女とはいづれが端麗なりや」

と問ひ給ふと、難陀は早速

「世尊よ、盲目の雌猿とソングダリーとの差があるに倍して天女の美にソングダリーは遠く及びもつきませぬ。

とお答へ申した。佛陀は難陀の心のすでに動くのを見抜かれて

「難陀よ、若し汝が、我が法中においてよろこんで修行を続けるならば、一生を終つてのち天上界に生れて、五百の待女と共に千年の間樂しむことを得るであらう」

と告げ給ふと、難陀は非常によろこび、ソングダリーの愛着を離れてそれから一心に修行を重ね、身を端正にし、空寂を樂しみ、正念を求めた。

然し佛弟子は誰れ一人として難陀に親しみ近づく者はなく難陀が来ると他所に避け、かへり見て言葉をかける者もな

つた。難陀は非常にそれを淋しく思ひ、佛弟子の一人にその故をきくと

「汝は今佛道を修してゐるが、その望むところはただ天上界の樂みで三界のうちの樂である。我等は出世間の道、佛果成道を唯一の願としてゐるので、汝と道を異にしてゐるから親しむことは出来ない」

ときびしく叱責せられた。難陀は佛弟子の総てから捨てられて非常な悲歎を続けてゐた。佛陀はここに機を愈々熟するをみられて、難陀の手を執り給うて大地獄に入り給うた。そこには無数の大釜があつて沢山の罪人が焼かれて阿鼻叫喚の苦をうけてゐるが、不思議なことに一つの大釜は猛火に包まれてゐるが中に罪人が居なかつた、佛陀はこの大釜を指さされて

「難陀よ、往きて獄卒に問へ。この大釜は誰のために用意せられるかを」

難陀はただちに獄卒に其由をきくと

「汝は聞かずや、佛陀の異母弟に難陀と呼ぶ者あり、愛欲に痴惑するが故にやがてこの大地獄に墮ち来るなり、彼のために大釜を燃焼するなり」

と。難陀は驚怖して更に問うた。

「我れ聞くに、難陀は佛道を修する功により、千年の間天上界にあつて天女と共に楽しむ果報を得たりと」

獄卒はカラカラと打ち笑つて答へるには

「天上界の千年は地獄の一日一夜にも及ばず、今に彼はこ

眞証のさとりに近くことを快まず、恥づべし痛むべし」

の親鸞聖人の御悲歎である。然しここに、悲哉と可傷、可悲の眼目が大切な問題である。すでに生死を超え給ふ佛陀の出世間の光明に照らされるところに愈々知らされるのは、我等の愛着の強さ深さである。

それではその始末がつかと言へば、元來妄念を地体とした身として、如何にすべき術もない。始末をつけねばならぬが始末のつけやうがない、かそいつて一度そのあさましさを知らされた身にはほつておくことも出来ない、そこに崩折れて行くよりほかにあり様のない私共に、如来招喚の悲心がひびく。「汝一心に正念にして直ちに來たれ、我よく汝を護らん。すべて水火の難に墮することをおそれざれ」

愛欲は水難である。瞋恚が火難である。断ら難き愛欲の煩惱、伏し難き瞋恚の煩惱、その底まで佛はよく知し召されての上に、「我能く汝を護らん」とあらはれて下さるのであるこの悲心の徹するところに身は愛欲の泥沼にあつて、そのまま佛が浮ぶのである。佛心にかへらしめられ、救ひ上げられるのである。然しそれによつて我等が愛欲を脱して了ふのではない、またしても愛欲の淵に沈むのであるが、その故に無限の慈悲を注いでやみ給はぬのであり遂には「愛欲といふ名もなき世界」に導き入れて下さるのである。

第二に「佛道を修し乍らも難陀は天界の果報を求めてゐた」といふことである。これは私共の知らず知らずしに墮ち易いと

の大釜の中に墮ち来るべし」

と、この時難陀は全身の毛もよだつて深く悔い大いに懺して「私の無上の樂しみと思へる天上界の快樂も、遂に地獄の業にすぎなかつたのか。若しこの大苦惱を受けるのであれば、最早天上界の果報も願ふに足らず。嗚呼、愛欲の果は遂に地獄の因にすぎなかつたのか」

と。佛陀は難陀の心機転じて、天上界の快樂に執着する心の消滅せるを知り給うて、再び手を執りて精舎に歸りたまうた。難陀は始めて眞実の我に歸り、佛前にまう出て申し上げるやう

「世尊よ、我が願ひしところは皆三界流転の果報でありました。ことに愛欲に痴惑する者の果の遂に地獄の大苦惱に過ぎぬことを知らしめられ、ここに三界を超え給ふ佛陀の御眞意を始めて知らせて頂きました。我今よりひとへに佛陀に歸依し奉ります」

と全身に汗を流しつつ懺悔し終ると共に心眼が自然にひらけ來つた。

### 救へられることども

第一に「愛欲に痴惑する者の果は地獄の大苦惱である」との難陀の悲痛な叫びである。煩惱肯定主義への佛陀のきびしい御教誡である。然しこれに対応して想ひ浮ぶのが

「誠に知んぬ。悲しきかな、愚柔鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の教に入ることをよろこばず、

ころである。人生は苦である、淨土の世界においてのみ一切の願が満される、だから念佛を申し、佛法をよく聞いて、是非淨土に生れねばならない。こう云ふ風に淨土は樂しき處とのみ思つて佛法を聞く者。更らに信仰生活に入つて立派な人間になろう、信仰を頂いてそれによつて人生を有意義に送りたいという風に、私共の夫々勝手な煩惱の求める理想境を実現するために佛法を聞く、これ等は皆難陀の求道と同じあやまりにおちてゐるのである。

私共は始めは自分の力を頼んで一切の願を成就しやうとするが、色々な難関に出遭ひ、自分の力の足らなさを痛感して來ると、人間以上の力を頼り、それによつて自分の勝手な願を満たさうとする。それは教を聞く者ではなく教を利用する者である。そうした願ひが満たされぬとなると神も佛もあるものかと恨み事をならべ、願ひが多少でも叶ふと始めはお蔭様でとよろこぶが、月日と共に用事ないことになつて了ふ。所謂お蔭信者の悲哀である。

「如来に調伏せられて如来に歸依する」と勝鬘經によつて聖徳太子が仰せられてゐるのは、ひとへに佛力の建現によるので、佛陀の御心があらはれるので、私共としてはそれに歸依せしめられるばかりである。

難陀尊者が最も理想とする世界も、佛陀とその眞佛弟子達にはあはれむべきことであり、問題外の世界であつた。我等が煩惱を根とし妄念を元として織り作して行く一切が、「そら」とたはごとまことあることなし」と信知せしめられ

るところに、その虚仮の全体に、微塵のすき間なく佛陀が哀  
の無限の御涙のそそがれてゐることを頂くばかりである。

難陀尊者も、「愛欲、愛執の果は地獄である」と佛陀の善  
巧によつて知らしめられたところに、世間を超え給ふ佛陀の  
御本意に触れたのである。そこに心眼おのすからに開けて、  
懺悔と感謝の涙が宿つたのである。

第三には華嚴經に善財童子が永遠の求道魂をもつて色々の  
善知識を訪ふことを説かれてゐるが、その中に方便命といふ  
知識がある。そこは見上げる様な刀の山が聳えてゐる、方便  
命はその山の頂から山下の大火焔の中に身を投じて苦行を續  
けてゐる。さすがの童子も悪魔の所作かと怖れるが、天上に  
声があつて眞の知識である疑うてはならぬと励まされて、童  
子も刀山に登り、大火焔の中に身を投じると、不思議にも安  
住三昧を得、次で照明三昧を得ると説かれてゐる。

福島先生は、この刀山とは我々が煩惱の焔の中で描き出す  
理想の山である、それは煩惱の樓閣である、そこから煩惱の火  
焔の中に身を投じる、火焔の中に落ちこむ、そこに刀山は消  
えて火聚ばかりとなる、これが私共の人生の姿であると先生  
は味つてゐられる。私は難陀の姿、それは私の姿であるが、  
その中に明らかに刀山火聚の教を仰ぐ。愛欲の理想を追うて  
ゐた難陀が天界の快樂を求め、これが聳え立つ刀山である、  
然しそのまんまが地獄の大火焔であると佛智に照し出された  
時、難陀は佛の眞実の慈悲を全身心に頂き始める、そこに安

聖親鸞を語る

三、法然聖人

親鸞聖人が法然聖人のお弟子になつて御信心をハッキリと  
お聞きになつたといふのが、今申します二十九歳の御時であ  
つたやうであります。ここにこの法然上人と親鸞聖人といふ  
ことを考へさせられます。法然上人は非常な円満なお方であ  
つたやうであります。尤も法然上人も少年時代には随分強い  
所を表はしておいでになります。御承知でもありましようが  
法然上人のお父さんは夜討に遭うて、深い手創を負うて亡く  
なられる。その時法然上人は未だ勢至丸といつて九つでいら  
せられた。敵が松明をつけてやつてくる、その敵の頭の源内  
武者定明の眉間を目がけて小さな弓、子供の小さな弓を引き  
しほつて矢をはなれる。その矢が定明の眉間に当つた、血  
がだらだらと流れる深い創ではないけれども血が流れるので  
定明は急いで陣をひいていつた。そういふことでなかなか少  
年時代には勇ましい一面を持つてをられた方でありましようが、  
お父さんの遺言で自分は死ぬるが決して敵討をしてくれるな  
お前が敵討といつて定明を殺すとその定明の子が又こちらの  
子供を殺すといふやうなことをしてゐたら、人間は何時まで  
経つても殺し合ひばかりしてゐなければならぬ。決して親の  
敵を討たうと思つてくれるな。どうか佛法の修行をして、そ

住と照明の三昧を味ひ始めるのである。それによつて火聚と  
刀山の世界を脱して了ふのではないが、静のおだまき繰り返  
してやまぬ火聚の煩惱海に無限の大悲を頂きつつ白道を辿ら  
せて貰うのである。

【歌集抜】

清水凡禿居士

みたされぬものしたひあひただなみだ  
すくひのみ手のそこにありしか  
喜びも悲しみもただとけあふは  
念佛のみの世界なりけり  
法談をうるさく聞かず父遊いて  
今は淋しと目をばうるほす  
進むとも退くもまた止まるも  
よし苦は去らじ御名稱へかし  
み光は無量無辺と聞くなれど  
はるけき旅は悲しかりけり

福島政雄

(続)

うして立派なものになつて親の菩提を申らうやうになつてく  
れと遺言して死なれた。漆間時国といふのがお父さんの名前  
であります。そのお父さんの遺言を守つてそれからやがて近  
所のお寺で出家をして十五歳の時から叡山に登つて叡山で御  
修行になつた。長い間でありまう、四十三歳でありますか、  
始めて法然上人は支那の善導大師のお言葉によつてお念佛の  
信心がお開けになつた、これは有名なことになつてをります。  
それから後の法然上人は非常に円満な方であつたやうであ  
ります。私共学生時代に村上専精先生の日本佛教史の御講義  
をきいたことがあります、その村上先生が日本の佛教史上  
で沢山高僧方がおいでになるがその中で一番円満な方は法然  
上人であると言はれた。それを今なほ記憶してをるのであり  
ます。實際村上先生の言はれた通りであると思ふのでありま  
す。なかなか円満な方であつた、それから親鸞聖人は法然上  
人と較べると何処かに非常な鋭さをお持ちになつてゐる、譬  
へば此処になかなか御信心の開けない人があるといふと法  
然上人はゆつたりとした心持ちで長い目で御覧になつて、そ  
の人の御信心が開けてくる迄辛棒強く待つておいでになる、  
教へながら待つてをられる、これが法然上人であるといふば  
親鸞聖人はそこに不徹底な人があるとすれば、何処何処まで

もその不徹底な所をたたいてお互に徹底する所までゆかうといふふうにせられ、一種の鋭さを持つておいでになる。そういふ遠い目があるやうに私は感じてをりますのであります。これは親鸞聖人の御肖像画が色々ありますが本派本願寺の宝庫の内に保存されてあります所の鏡の御影、といふ親鸞聖人の御肖像があります、墨絵の掛軸になつた御肖像であります。その御肖像を一度拜見したことがあるのであります。やつぱり親鸞聖人は唯やさしいといふ方ではなく、何処か非常に意志の強いと申しますか、意志の強くて鋭いといふ所を顔の何処かに感ずる、頬骨の辺に感ずるやうに私は思ひますのであります。けれども親鸞聖人の鏡の御影の目をみますと非常に慈愛の眼を持つておいでになる、だからもともと非常な鋭さ、意志の強さを持つておいでになつた方が、法然上人のお念佛の教に、法然上人の円満な御人柄に感化されて其処に聖人の非常な鋭さが和けられて、「親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」とよきひとの仰せをかうぶりに信ずる外に別の仔細なきなり」と言はれますやうに、よき人は法然上人であります。法然上人のおつしやる通り、そのお念佛唯一つ、これよりほか何にもない、こゝにいふことを數異抄に仰しやつてあります。要するに親鸞聖人は法然上人にすつかり従つておいでになるけれども、その個性の違ひと申しますと、人柄はもともとハッキリ違ふ、こゝにいふふうには感じてをりますやうでございませうか。

#### 四、結婚生活

あのやうに妻を持ち子を持つてお念佛生活をされた方であるところが親鸞聖人が理想の人物として親しみ崇めておいでになつた方が少くとも二人ある、その一人は聖徳太子、もう一人は教信沙彌であります。親鸞聖人の御言葉に自分は教信沙彌の足跡を辿つて行くやうなものだ、教信沙彌の定なりといふ御言葉があつたやうであります。そういふことを仰しやつてある、そうすると教信沙彌の生活のやうな、そういふ生活を自分もしてゆくのである、これは法然上人の御弟子におなりになつてから後の親鸞聖人の御自覚であります。それでありますから僧侶が妻を持ち子を持つ、こゝにいふ生活をなさつたのは親鸞聖人に始めてはじまつたことではないのであります。これより前に沙彌と云はれた人はさういふ生活をしてをるのでありますけれども、親鸞聖人はさういふ妻子を持つ生活の上に念佛の御信心といふことを徹底してくる所を味はつて、深く味はつて一生涯をお過しになつた。その点においては、それまでの誰よりも深い信仰上の生活をなさつた。こゝにいふことになるであらうと思ひますのであります。それでありますからして京都時代に結婚生活をしておいでになつたかも知れません。

あの法難に遭つて法然上人は四国の方に流されておいでになる、そうして越後に於いて親鸞聖人が結婚生活にお入りになつたことは確かなことであります。それは恵信尼と云はれる方と結婚生活に入られたのである、そうしてつまり越後にお流されになつたのが三十五歳であります、今度は御許し

そこで今度は親鸞聖人の結婚問題であります、前に申しましたやうに二十九歳の時に六角堂の観音様の御示現、お告げ、あのことがあるのであります。普通私共がききます親鸞聖人の御伝記では京都時代に玉日姫といふ方と御結婚になつた、それも法然上人の仰せのままに御結婚になつた、といふふうには普通になつて居るのであります。

所が玉日姫がどうも大分あとでつくられたお話ししいやうである、と親鸞聖人伝を研究して居られる方はさう云はれるのであります。それで成る程常陸の稲田の御草庵の跡なんかへ行つてみますといふと玉日姫の御消息といふのがあり、この恵信尼といふのは玉日姫と同じ方である、名前が違つただけであるといふやうなことで、玉日姫の御消息はこんなものがあると思はれますのでありますけれども、其処にやつぱり色々な材料によつて研究しておいでになる方の仰しやる事を考へてみなければなりませんと思ふのであります。さういふ方々の仰しやる事によれば玉日姫のお話といふのは後で創られたお話であるといふことになつて居ります。親鸞聖人は玉日姫といふ配偶の方はなかつたかも知れませんが、京都時代にすでに結婚生活を送つておいでになつたかも知れない、これは考へられるのであります。親鸞聖人を法然上人の処に導いてゆかれた聖覚法印といふ方も、結婚生活をしておいでになつたのであります。のみならずこれは平安時代の中頃からこの佛教の方の人々で沙彌といはれた人々、皆さんよく御承知の教信沙彌はその一人であります、教信沙彌は

が出て越後から関東常陸の方に山河を越えてお移りになつたのが四十二歳かそこらの時にお移りになつたやうであります。関東の御生活が凡そ、二十年、四十二、三歳頃から六十二、三歳頃迄の二十年間、この二十年間といふものは親鸞聖人の御一生のうちでも割合に幸福な御生活の時代であつたであらうと、こゝにいふことを考へさせられるのであります。

親鸞聖人はだんだんと御念佛の道をおひろめになつたのでありますけれども、聖人は決して大勢を集めて御説教をするといふやうなことはなさなかつたやうであります。聖人がお念佛をおひろめになつたそのやり方といふものは、時々小さな御堂のやうな所とか、人の住居なんかもさうであるかと思ふのであります、そんな所に五人、七人、九人といふ極く少数の道を求め人々、寄り合ふ、そこに聖人がおいでになつて、さうして聖人御自身が自分の御生活の中にお念佛の味を味はつておいでになる。さうして銘々自分の心持ちを打ち開いて申す。さういふ兩方の心持ちを打ち開けて申す。さういふ兩方の心持ちを打ち開けるやうな集り、ごく少数の集りを時々催しておいでになる、こゝにいふことをしておいでになる間に親鸞聖人のお念佛の信仰といふものが、何時の間にか常陸の人々の心に沁み込んでいつた、これが非常に大事なことであると私なんかは感じてをります。決して聖人は高座の上にあがつて御説教をするやうな態度でお説きになるやうなことはなかつたといふのか聖人の特色であつたのであります。さういふふうにして何時の間にかお念佛をおひろめにな

つた、それかだんだん沁みこんでゆくのであります。

そのうちに恵信尼との間に何人かのお子さんがお生れになつてそれを育てておいでになつて御生活は決して豊かなものではなかつた。尤もだんだん同行達がおいでになつて聖人を助けてあげるといふこともあつたに違ひありませんが、決して豊かな御生活ではなかつたのであります。

けれどもそのお生活といふものは親鸞聖人の御一生では家庭として一番仕合はせな時代であつたであらう、何でそんなことを申しますかといへば、これも恵信尼の御消息の中に申すのであります。これはその御消息といふのが親鸞聖人が九十歳で京都でおかくれになる最後迄主として御世話をなさつたのが覚信尼と云はれる親鸞聖人の女のお子さん、御承知の通りであります。そうしていよいよ御臨終には他の三、四人のお子さん方も間に合つてお出でになつたらしいのであります。恵信尼は越後のお里にをられたやうであります。そのおかくれになつたといふお報せが覚信尼からお母さんの恵信尼にいつた、その御手紙は残つてをりませんけれども、恵信尼から御娘子の覚信尼への御手紙が残つて、これは私も直接拜見したことがあります。その御手紙の中に有名な常陸の国で恵信尼が夫の親鸞聖人を親音の化身と夢にござらになつたあのお話しがあります。その夢と申しますと、何でも御堂が新築されて堂供養がある、夜のこととてその御堂の前にづーつしと立て明しと申しまして松明が御堂の前に列をなして燃

方は慎み深い人であつたやうに考えるのであります。自分の御子さんに対してさへも親鸞聖人が親音の化身だといふ夢をみたといふことを聖人が御入滅になる迄黙つてをられた、御入滅後に始めて打ち明かされたのであります。そういふ時代が親鸞聖人としても御家庭の生活の上では一番幸福な時代であつたのではなからうか、そうしますと御伝鈔の中にありますやうな、前に申しました四句の偈文のあとに、この東の方にけはしくそびえてゐる山に沢山の人がゐる。その人達にこの心持を告げ知らせるといふ夢で目が覚めた、とあります。これは聖人が妻となる人は親音であると感じて、その心持を多くの人々にお話しになつたことを物語るののであります。それ故に親鸞聖人の方からは御自分の御内室を親音の化身、内室恵信尼からは夫親鸞聖人を親音の化身と思つてゐられる、これはなかなかうるはしいこととあります。

なかなかそんなに夫婦が両方から親音の化身と思ふものではないのであります。夫婦いふものはお互いに永い間一緒に居ると欠点のみえて仕様のないものでありますからして、なかなか自分の夫が親音の化身だ、自分の妻を親音の化身だといふことと思えるものではないのであります。親鸞聖人はそういふ恵信尼、それも自分の配偶を親音の化身といふふうな夢に見られた。夢か、夢なんかあてになるものではないといふ考え方もあるに違ひありませんけれども、然し私共の夢には色んな種類があります。それは親鸞聖人のいつておいでになるやうに夢にはほんやりした空の夢と正夢と二種類ある。

えてゐる、其処のところは鳥居のやうなものがある。その鳥居に二つ佛像らしいお姿がみえる、上にかかつてみえる、その一方の佛像はお顔がハッキリみえない、全体が光りばかりにみえる佛様である、そうすると恵信尼は夢の中で傍にをつた人にあの光りばかりにみえる佛様のやうであります。あれは何といふ佛様でありすか、とたづねますとあれは勢至菩薩です、勢至菩薩であつて法然上人だ、とこういはれた。それからもう一つの佛様のはつきりみえる方のあの佛様はどんな佛様でありますかとたづねると、あれは親音様であります、そうしてあれは善信の御坊、親鸞聖人である、こう云はれた。これを聞いたと思ふと目が覚めた。昔常陸時代にこういふ夢をみたことがある、それから翌る朝になつてからお前のお父様、親鸞聖人に斯様斯様に光りばかりの佛様がみえてそしてそれを傍の人に聞いたら、これは勢至菩薩で法然上人だと聞きましたといふやうなことをお父様にお話したら、それは正夢である、法然上人は本当に勢至菩薩の御化身とこうお父様が仰しやつたけれども、お父様が親音様の御化身だとみたことは流石にお父様に言はなかつた、又そんなことを、自分の夫が親音の化身だといふやうなことは滅多に人に言ふべきことではないと思つてゐたから黙つて誰にも言はなかつたけれども、お父様の親鸞聖人がおかくれになつたといふお前の手紙をみてから始めてお前に打ち開ける、お父様は親音様の御化身である、こういふ御手紙であります。

この恵信尼の御手紙を考えてみますと非常に恵信尼といふ私共が思ひもしない、まるで違つたことを夢にみることもありますが、かねてしんから心に思つてゐることを夢にみることもしばしばあります。しんから思つてゐることをその通りに夢にみるといふやうな夢は所謂正夢であります。その中にはその人の眞実が現はれるといふことも本当である、夢はみんな虚だといはれぬ、夢にみたから本当である、夢にみるほど本当であるといふこともある。それでありますからして今のやうな話もやつぱり親鸞聖人の方からも恵信尼の方からも心から親世音の御化身、夫は親音の化身、妻は親音の化身、こういふ心持が通うてゐた。常陸時代の親鸞聖人の御生活がそれで何となく解るやうに思つてあります。尤もそんな常陸時代の御生活が幸福な御生活であつたとすれば何故六十越えてからその恵信尼なり御子様方をふりすてるやうにして常陸に残したままで御自分一人京都にお歸りになつたか、そうして恵信尼は自分のお里である所の越後に歸つて老年になつて親鸞聖人と恵信尼とは別れ別れの生活をしておられる、恵信尼の方は三人か四人のお子さんを連れて親鸞聖人の方は一番末の覚信尼と云はれた方が、京都で大変不仕合はせな方であつたやうであります。その世話をして晩年をお過しになつた、そこで親鸞聖人の伝記の上に、私共がどう考へていいかよく解らぬ所があるわけがあります。どうしてそんな晩年になつてから別れ別れの生活をなさつたのであるか、色々考へ方があります。

これは親鸞聖人の御生活が非常に経済的に苦しい御生活で

あつたであらう、それで京都にお一人で、色々不仕合はせな目に遭つてをられる末の御娘のお子さんの世話をなさるために親鸞聖人一人だけ京都に行かれた、そうすると惠信尼は越後のお里にゆかれれば先づ生活の道は立つからして越後のお国に三、四人のお子さんを連れておいでになつたらうといふ想像もつきます。

もう少し違つた方面から考へますといふと、いやそうではない、親鸞聖人は非常な求道、道を求めるといふことに一すぢな方であつてそれで六十こえてからどうも若い時代に一切経を京都で読んで抜書きなんかもおかれた、それによつて御本書として残つてをります教行信証をお著しになつたけれども、もう少しその記憶をはつきりしたい、その爲には若い時によんだお経をもう一度當つてみて誑直しく考へて見なければならぬ、その爲にはどうしても京都に帰らなければさういふ便宜はない、関東の方においては一切経をみるといふ場所がない、一切経をもつてゐる所がない、これは成程金沢文庫といふものがありますけれども、金沢文庫は漢籍を沢山集めてありますが、佛教の方の一切経といふものはなかつたやうであります。それでありませうからして、どうしても一切経に當つて深く考へるためには京都に帰らなければならぬ。さういふふうの所から寧ろ一人で京都に御帰りになつたのである、生活は別れ別れの生活になつて仕方がないといふ人間ばなれた心持で京都に一人でお帰りになつた、さういふ考へ方も出来ませう。そのところは私共が確かにこうであるに

## 眞實の淨信

過ぐる日『慈光』の一読者から、だいたい次のやうな意味の御質問に接した。

「人間は五分五分相対するもので、その故に迷ひ苦しむ。

佛は絶対で、その人間を救うて下さると聞いてゐるが、その絶対の佛の實在が肯定できないので困る。もちろん有限の凡夫が、有限を超えた佛を認識しようとするのは、昼天に星を見ようとする愚事であらうが、無色無形の電氣は、その認識はできないが、ラジオ、電灯によつてその實在を証明してくれる。

人間の理性として、ある程度その肯定の出来るやうに説明されるのが、佛の愛をわが身も信じ、他にも弘める自信教人信の喜びであらうと存する。故近角先生は『自分は如来にあつて来たのだ。人間はへだて心があるが、そのへだて心の故に苦しむ。しかるに佛はそのものをどこ迄も捨てない、それが佛であつた』と、佛にあつたと申されてゐる。われ等はそれが信じられないが、どうかさう信じたいと念願してゐる。しかし信じようとすればするほど、いよいよ信じがたいものやうに思はれる」と、それについて私は、次のやうにお返事申しあげたのであつた。

違ひありませんといふことを申し上げることは出来ませんが、私もはつきりした見当はついてをりませぬのであります。そこに親鸞聖人が非常に人間らしい方であつたか、人間ばなれのした方であつたか、さういふ問題がそこにありますわけでありませぬ。兎に角、事実としては二十年間の関東の生活をふりすてて、京都に独りでお帰りになつたといふことが事実になつてをります。さういふことで今度は京都にお帰りになつて晩年の親鸞聖人がどうであつたか、さういふ問題になりますのであります。

以下、次号

### ◆良書紹介

#### 親鸞聖人の生涯 文博 福島政雄著

親鸞聖人の御一生を学びますうちに、私の淺薄ないのちが聖人の深きいのちによつて目ざめさせられ、暗い心の私が少しづつでも心の明るさを感じます。著者。四六小判、一八二頁。定価百円、送料十五円。内容はよく碎かれたもので聖人を渴仰せられる皆様方には是非御勦め申上げます。

發行所 京都市右京区山内御堂殿町 自照舎  
振替 京都 六八四八番

### 中野 駿太郎

○  
お手紙拜見しました。御質問の件につき、お返事いたしました。

まづ絶対の佛の實在が肯定出来ないと言はれますが、それは凡夫には肯定出来ないのです、その出来ないところをあはれんで下さるのです。凡夫は迷ひの基盤の上に立つてゐます。そしてそれとは別箇に、悟りの基盤の上に立つて、その迷つて苦しんでゐる凡夫を憐れんで下さるのが佛陀であります。迷ひの基盤と悟りの基盤と、二つ基盤を異にしてゐます。基盤を異にしてゐますから、異つた基盤の上に立つてゐられる佛陀の慈悲といふものの實在といふものがわからないのです。これはわからないのが当然で、わからぬと見たから、そこを憐れむといふ佛陀の御慈悲で、これは一方的なものであります。

日本人同士の間なら、日本語で話すので話は通じます。しかしアメリカ人に話しかけられても、こちらで英語を知つてゐなければ、何を言うてゐるのかわかりませぬ。これをわかろうと如何に力んでみたところで、それは無理です、英語を知らないでゐて、アメリカ人が英語で話すのがわからないと言つて、アメリカ人を責めるものがあまませうか。常識があ

れば、誰もそんな愚かなことはしないでせう。それはこちらは、日本語の基盤に立ち、こちらは英語の基盤に立ち、その立つ基盤がちがふからです。

アメリカ人の言ふことがわかりたいと思つたら、まづ夫つて英語を学ばか、或ひは通弁をたのむかしなければなりません。

さういふ手段を講ぜずして、どんなに努力したつて、それは無駄です。つまり凡夫が佛陀の实在を知らうと力むのは、英語を知らぬものがアメリカ人の話す意味を知らうとするやうなもので、まことに無駄なことです。これを自力と言ひます。

### 三恒河沙の諸佛の

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

自力かなはで流転せり

この自力かなはずして流転して来た、さうして今度この人間として生れて来て、なほその自力をやめず、今も流転をつづけてゐるのが凡夫の姿であります。

人間の理性として、或る程度その肯定の出来るやうに説明すべきであらうと言はれますが、人間の理性そのものが、結局迷ひの基盤に立つこの理性にすぎないので。迷ひの基盤に立つてゐるこのあらゆるものは、悟りの基盤の方には通じないのです。

わかるやうに説いてくれといふ御不満ですが、それももつともと思ひますが、理性といはうが感情といはうが、凡夫

節の到来をまつほかはありません。

かう申しますと、まことにたよりのない、またはなはだ冷淡であると思はれるかも知れませんが、どうもここは致し方がありません、されば親鸞聖人も『教行信証』の總序に、「あゝ弘誓の強縁は多生にもまうあひがたく、眞実の淨信は億劫にもえがたし。たまたま行信をえは遠く宿縁をよるこべ」と仰せられてゐるのであります。実にたまたまです。さうめつたにあへるものではありません。これゆゑ遠く宿縁をよるこべといふことになるのです。

しかしそれでは全然方法はないのかといふに、さうでもなく、ここは『蓮如上人御一代記聞書』にも「時節到来といふこと、用心をもつて、そのうへに事の出来候を時節到来といふべし。無用心にて出来候を、時節制来とはいはぬ事なり。聴聞を心がけてのうへの宿善無宿善とも云ふ事なり。ただ信心は聞くにきはまることなる由、仰せの由に候」とあり、また「いたりてかたきは石なり、至りてやはらかなるは水なり、水よく石をうがつ。心源もし徹しなば、菩提の覚道、何事か成せざらんといへる古き詞あり。いかに不信なりとも聴聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候聞信をうべきなり。ただ佛法は聴聞にきはまることなりと云々」とあるやうに、熱心に聴聞する道を求める、そしてその上で時節の到来をまつといふことになるのです。

近角先生が佛にあはれたと申されたのは、この佛のお慈悲を知らせて頂いたことを申されたので、信じようとしても信

の在来あるものは皆駄目なので、役に立つものは一つもないのです。英語を知らぬものが、アメリカ人に、もつとわかるやうに親切に話してくれといふやうなもので、これは無理です。話す方の話しかたが悪いのではなく、それを受け入れるだけにこつちがなつてゐないのがいけないのです。それですから、こちらに受入体制がととのつてゐないといふことに氣づかねばなりません。

ところで、それではどうしたら受入体制をととのへることが出来るか、英語を学ばなり、通弁を連れて来るなりは、どうしたら出来るのかといふことになりましたが、しかしそれも結局こちらのはからひで、別にさういふ方法といふものはないのです。ここが求道者の血の涙をながすところなのです。

そこでいよいよのところは、眞宗においては聴聞といふことになるのです。さきにも申しましたやうに、佛陀のお慈悲はまつたく一方的なもので、こちらでは受入体制もとのへることが出来ない。前の例で言へば、アメリカ人の言ふことを知するためには、英語を学ばとか通弁を介するとかいふ方法がありませんが、佛陀のお慈悲を知る、お言葉を知るためには、こちらでは、かうすればよいといふ確実な方法は一つないので。その自力無効、近角先生がよく言はれた、實にしてみやうのない、そこを見てあはれむといふ、それが佛のお慈悲です。それで熱心に道を求め聴聞をつづけてゐれば、やがて時節が到来し、宿善開發して、ふとそのお慈悲をわからせて頂くので、ここが絶対他力といはれるところなのです。ただ時

じがたい、自力のはからひでは駄目な、そこを憐れむとのお慈悲なのであります。そしてそのお慈悲がこちらの心に到り届いたのが、信仰の徹底であります。

はなはだ拙なお返事であつたが、何等かの御参考ともなれば幸甚である。

### △ 聖 語 ▽

悪人の賢者を害するは、なほ天を仰いで唾するが如く、唾は天を汚さずして、かへつて己が身を汚す。風に逆つて人に塵埃を投げれば、塵、彼を汚さずしてかへつて身を汚すごとし。

華の香りは風に逆はず、徳の香りは風に逆うて転

寝ねざれば夜長し、疲れ倦めば道長し。愚者には生死長し、正法を知るなければなり。



# ◇ 編集後記 ◇

九月五日日露の講和の調印された日、半世紀を終た今日、日本の講和会議が同じ来国で開かれ予定通り調印された。然しソ聯も、中国も参加していない、印度はまた異なる立場において単独講和を出している。今後の日本の立場は重大な責任を持つて来た、重疊たる山嶽が前途に横たはつてゐる。既決、未決の一切の問題を我等の共業として、大いなる道を歩まねばならない。大いなる道とは、我等の我執の常として右に偏し左に傾くのであるがそのことをよく自照せしめられつつ、古今に通じ中外にもとらぬ道を歩ませて貰ふことの日課重大な時はない。それは念佛の中に自然に導かれてゆく道である。解脱の幸福は、照されて有無の邪見の破られて参る道である。

◇ 惠信尼公は親鸞聖人の御後室であり、尼公の文書こそは聖人の御傳記を知る最も大切なものである。聖人が堂僧であつたこと、法然上人に面会下された時の模様など、聖人の信仰の中心を誌されてあります。

◇ 「聖親鸞を語る」の福島先生原稿は次号まで続いて記載させて頂きます。本稿で特に聖人の結婚生活に關し詳細に御述べ下さいまして、沙彌生活の範を掲げて下さいました。世間と共に佛法も胸敗しきつた鎌倉時代に解脱、明惠兩上人の如く「釈尊に帰れ」と叫

ばれる持経者と、在俗生活に没してそこに佛道を味つて参る沙彌生活者の二つの流があり法然、親鸞の兩聖人は後者の代表であります一つは高く輝き、一つは低く地に潤うて行く道であります。

◇ 「眞実の淨信」は中野師が慈光誌の謄者の質疑に答を與えられたものであります。「世間虚仮」を知らされ始めて未だ「唯佛是真」の光の射さないところに血のにじむ苦があります。大切に聴聞下さるよう念じて居ります。

◇ 「難陀の救済」は世間の欲の樂にのみ耽つている我々に、きびしくおごそかな、然も無限の慈悲の溢れる御心を徹到して下さいました。感じさせて頂き、御照会いたしました。

佛説成道の「我」は、法然、惠信、日蓮の三聖人に對し、一ねたみの道理によつては許し難い、世樂に耽る者に涅槃の樂は悟ることが出来ぬであろう。若しそれを説いても唯疲勞を増すに過ぎぬ」と思惟されて、口を堅く閉ぢられていたが梵天の懇請によつて遂に「我は効なきを思いたればこの法を人々に説かんとはしなかつたが、耳ある者の聞いて信を得べく、不死の戸を彼等に開かん」と告げられて、八十御入滅の日までその御苦勞が続けられた。

佛陀の異母弟、難陀尊者の救済も、世間甚難の茨の道を、徹到した御智慧と無限の悲心をもつて御折下さされ、我等にたいのよるべを知らせて頂くこととあります。

花田記

昭和二十六年九月十日 印刷  
昭和二十六年九月十五日 発行  
毎月一回十五日発行  
定価 一部金 拾五円(郵税共)  
定価 一年分金百八拾円(郵税共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集兼 花田 正夫  
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八

一道會館

發行所 慈光社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番